麻生路郎主幹

川柳雜誌

二月號

川柳雜誌第三卷第二號目次

募集句　近作柳樽、會報、各地柳壇
川柳書架等

感想・評論

本來の義に還れ　川村花菱
川柳家シラノ　前田雀郎
大朝大毎に與ふ　麻生路郎
言ひたい事　井上刀三
近事片々　林田馬行
敬慕せる路郎氏へ　安川久流美
曰く曰く曰く　三好革郎

創作

近作　麻生路郎
川柳塔　井上刀三
同　竹田蘆穂
同　松本助六
同　關本雅幽
同　西垣松雨
同　庄万よし
同　黑木莢豆
同　森田輝翠
同　河南放馬
同　吉川啞人
同　三好革郎
同　岩崎柳路
同　馬場月兎
同　高橋かほる
同　伊藤彦造
同　林田馬行
同　橋本二柳子

研究・其他

隨筆裏と表　蛭子省二
句作上の常套語　麻生路郎
新麦橋より　庄万よし
二篇素讀後始末　省二生
新作邪瑠璃　西垣松雨
漫畫四照　吉田きよし
川柳番附　啞人生
川柳家の戸籍調べ　馬行生

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　大正十五年二月一日發行　大正十五年一月廿五日印刷納本（毎月一回一日發行）

水了軒のお辨當

旅行に…集會に

山をほめ海をたゝへてお辨當

大阪梅田驛前

水了軒

電話（北六四〇番）
（北一八三四番）

川柳家シラノ

―榴花洞漫筆―

前田雀郎

やい、やい、なまくら小僧、貴公のせりふはそれだけか。せいぐ〜調子を變へた上同じ事でもずゐぶん違つた言ひ草もありさうなものだ……

まづこんなものさ、よく聞けよ……。喧嘩づくなら『お前さん、おれがこんな鼻だつたら、早速切斷して貰はにやならない』深切づくなら『それでちぴ〜あがつたら、コップに鼻がはいりませう。特製の茶碗で酒を上がるがいゝ』叙事文ならば『岩あり……峰あり……岬あり……果して岬ありや、では半島なり』苦勞性ならば『その細長い袋は何ですね。インク壺か、鉄入れか』上品なら『あなたは小鳥がお好きこみゐますね。可愛らしい爪をのせるには成程たつぷり廣いこまり木でございませう』無作法にいふなら『あなたが煙草をあがる時……煙が鼻から吹き出したら、近所合壁　勢のいゝ煙を見て火事だと騒ぎはしませんか』心配性なら『鼻の重みで頭が下りはしませんか……前にのめらぬ御用心』優しくいふなら『小さな傘でもおさしなさい、折角の色艶が天日で褪めるといけません』學者めかすなら『例のアリストファースがいつた、ヒツポカンペレフアントカメロス（海馬と象と駱駝を合せたやうな獸）といふ奴は、恰度こんな風な肉と骨の塊を、瘤の出た額の下に、はやしてゐたに違ひない』今風ならそれは最新の流行ですか、こんだ調法な帽子掛けですね』大袈裟にいふなら『ごうもお立派ないばつた鼻ですな、大抵の風ではくしやみも出ますまい』芝居の白めかすなら『その鼻が血を

流しなば、けに紅海も何のその』褒めていふなら『香水屋の看板ですね』抒情詩で行くなら『そは海に吹く貝の笛――トリートンにこそ君はあれ』無邪氣になら『その紀念碑の除幕式はいつですか』お行儀よくなら『謹んで御挨拶申上げます。往來に張出しができましたな』山出しの言ひ草なら『これが鼻かい、あきれたものだ。これハア、うら生の南瓜か、出來のいゝ蕪だに』軍隊風なら『騎兵隊現はる、鼻砲用意』實用向なら『福引の景物におしなさい。それこそ一番大當りでせう』さてまたビラームもごきの白でいはうか『やおれ主人の顏の造作を損ねをつた鼻めを見い、過ちを恥ぢて赤くなつたわ』――まアお前さんにこれんばかりの才氣があり文字があれば、この位のことは云へるのだが、いやはやお氣の毒な人間の、云々（楠山正雄氏譯による）

これはシラノ――多分皆さんの中にも映畫で御承知の方がございませう。例の鼻の大將、詳しく云へば佛蘭西の劇作家エドモン、ロスクンの傑作『シラノ、ド、ベルジユラック』の主人公、詩人で哲學者で兼ねて戀を知る勇士シラノの、劇中第一幕（脚本ではその第四景）に於ける啖呵であります。

素適な白ではありませんか、ごうですこの縱横な才氣と自在な言葉とは……私はこの白にぶつかつた時、思はず恐れ入つて首を下げて仕舞ひました。

シラノは立派な川柳家ですね。このくらゐ自由な見方と、豐富な語彙を持つてゐたら何處の句會へやつたて決して引けを取りません。

シラノの、あの段鼻一つにさへ見やうによつてはこんなに言葉があるのです、つくづく川柳家と云ふものは、言葉を豐富に持つてゐなければいけないと思ひました。

言葉を豐富に持つてゐると云ふ事は、それだけまた表現の方法を豐富に持つてゐる事です、いつかも久保田萬太郎さんと、古川柳に就いて話しあつた事がありましたが、その時久保田さんも古川柳の――と云ふよりも、江戸人の持つてゐた語彙の豐富だつた事を、心から羨ましがつてゐました。まつたく古川柳の、あの自在を極めた表現の妙は、この豐富な語彙の力が非常な助けとなつてゐます。

然し單に言葉を豐富に持つてゐると云ふだけでは、まだ完全とは云はれません。その應用を、使ひ道を知らなければ所詮は寶の持ち腐れです。その言葉が正しい所へ正しく用ゐられる時始めて言葉を持つてゐた甲斐があるのです。

一つの言葉を正しい所へ正しく使ふには、先づその前に正しく物を見、正しく物を摑むと云ふ事が大切です。殊に川柳家にあつてはわづか十七文字の中に　複雜な人の世の姿を寫さなければならたいのです。その爲めには、正しい中にも正しい、相

手の本當の魂を――命を摑まねばなりません。

川柳家にとつて、その相手の命を摑むと云ふ事は、何所を摑まへたら一番それが生きるか、即ちその燒點の取り方です。例へば一個の壺を寫すとして、その壺の形をハッキリ人に傳へるには前からか、横からか　或は後、時によつては底をひつくりかへしても見、中へ飛び込んでも見なければなりません。そして、その爲めに一番効果のあると自信し得た所を寫す、それが魂を摑む事です。

摑んで得、この摑んだものはざう云ふ言葉で云ひ現はすのが一番正しいか、それを充分に探さなければ何にもなりません。何故ならば正しい言葉と云ふものは一つよりある筈はなく、この言葉は物を正しく摑まへぬ以上算見される譯がないからです

シラノのあの自在な言葉は　決して出鱈目に算せられたものではありません。みなこの摑むものを摑んだ上、それを一番正しい言葉で表現してゐます。シラノがあの段鼻一つにあれだけの言葉を並べてゐながら、そこに一つの無駄も無く、悉く我々を同感させると云ふのは、シラノが自分自身鼻の廻りをグル〳〵廻りして、あゝでもない、かうでもないと、口から出まかせな熱を吹いてゐるのではなくそれ〴〵の立場からピタリ〳〵と燒點をあはせて行つて、そこに少しも動きがないからです。

動くやうな川柳を作つたのではまつたく勞して効なき業です

文壇が既成に對して新感覺を叫びつゝあるのも、柳壇にまた革新の聲の聞こえて來たのも、要するに今までのものがさろ〳〵ピントはづれになつて來たからです。

我々の持つ概念と云ふものは　時代と共に進んでゐます。にもかゝはらずある一部の人達は　昔の所に腰を下して寫眞機を据ゑて相變らずこれが正しいものだとピンボケばかりを寫してゐますから時代と共に進んでゐる人達はそれを物足りなく思つて新しい燒點はこゝからだ〳〵と叫んでゐるのです。從つて私どもが常に正しいものをさへ摑んでゐれば、革新も既成もあつたものではありません。正しいものは常に正しからです。

言葉の話から、大分話がそれて來ましたが、言葉が感覺の表現である以上、また概念の進歩と共に進むべきでありますから正しい言葉を發見すると云ふ事は、いつになつても新しい筈であります。してみると矢張り私の云はうとしてゐるのは、結局は今の問題に落ちて來ます。

我々川柳家は既成の革新のと角目立てゝ騒ぎ廻る前に、先づ正しく物を見、摑み（正しい言葉を發見し）正しく表現する事に努力しなければなりません。何と云つても最後の勝利はこの事の完成です。

私は今、それを愛する我がシラノに敎へられたのです。どうか皆さんも私と共にシラノの白を味はつて見て下さい。

近作柳樽

路郎選

さしあたり食はねばならぬ盗みにて　螢池　逸錢　同
當直を信じて妻の無事な顔　同　同　同
ごもならん息子だつたと頼りにし　同　同　同
籠の鳥昔の唄で春を告げ　同　同　同
交番を見ぬやうにするきずを持ち　同　同　同
ヒステリー惜しい着物に穴をあけ　同　同　同
これからが俺の世界を養子病み　同　同　同
書置に死ぬと云ふ字の無いもよし　同　同　同
見榮に云ふ嘘に女はしやべりすぎ　同　同　同
刑事もう知つてる樣にたゝみ込み　神戸　同　同
いつまでも世間小供にして置かず　同　同　同
死ぬるのは覺悟であつた冒險家　同　同　同
病床へ返濟の期が迫つて來　同　同　同
亡くなりし父の言葉はあやまたず　同　同　同

共稼ぎ女房疲れた顔もせず　同　同　同
共稼ぎ休めば用の多い事　同　同　同
ストーブの傍に餘分な椅子があり　同　同　隨帖
兒の唄を父も愉快に唄うたり　同　同　同
女房が先づ水道の氷柱を見　同　同　同
當分は弟子にもなれぬ亀相する　同　同　同
志變つてるなと知る厚司　同　同　同
想ふては沈む男となりにけり　同　同　同
押入の中に世帶のあせたもの　螢ケ池　白蝶
貧乏に娘健氣に承知する　同　同　同
陽の影が曲つて川の底に着き　同　同　同
ズバ抜けた智恵局長に怖れられ　同　同　同
輕業に涙ぐましき子の行方　同　同　同
寒いこと硝子の水の澄み切つて　同　同　同

氣合拔きしゆんかんと言ふ聲を出し　廣島　露斗
名人は食ふに困つて一つ彫り　同　同
案外に降り出しました尻からけ　同　同
他人とも思へぬ意見きかされる　同　同
上かん屋みんな昨日に煮いた色　同　同
夜具へ身を横たへてから親の事　同　同
浮かぬ顔してタイピスト手を休め　旭川　志貴南
實のならぬ花と思へぬ美しさ　同　同
散る花の姿餘りにけばけばし　同　同
父樣に似てるこ妾大事がり　同　同
妾宅の貰ひ子ませた子に育ち　同　同
シチューのお變り仲仕三人居る　神戸　一狂
燒糞になり有金を調べて見　同　同
アトリエへ小藝術家五六人　同　同
焚火してゐるよこ子供起される　同　同
吾が事の樣に雀は逃げちまひ　同　靜雲
雨のもる事ぼやいてる曲馬團　大阪　同
小便が氷になるこ云ふ話　同　同
安靜を要しますこ醫者手を洗ひ　同　同
除隊後をまだアリマセスが取れて居ず　同　聞路
八寸のここまで破れた二尺ざし　同　同
口惜しさは家へ歸つてからの事　同　同
驛賣りへ見送人が邪魔になり　同　同
眞先に名乘り上げたが先づ切られ　同　同
寒さうな聲で競賣始められ　和歌山　無心
犬に番させて電話を借りに出る　同　同
丸髷こなつて無沙汰の詫びを言ひ　同　同
割引券行く氣もないがしまつこき　大阪　塊佛
相談にのる氣の膝へ灰が落ち　同　同
自動車に乘るステッキを仲居持ち　同　同
獨りぼちひがみにも似た氣のある夜　神戸　ひで一
絹夜具の初め輕くてねつかれず　同　同
たゞすまぬ思ひに滿ちて歸る夜　同　同
月給は云はず語らず靴の色　同　吐露樓
出て行つたあこに爆發する笑ひ　同　同
不景氣を聞き及びたる二年生　同　同
あられはれながら嬉しい足が向き　大阪　乾坤
寄せ付けぬ樣に結ひ立て首を振り　同　同
貧しさは女房の髷も小さくなり　足代　光太樓
牛の眼こにらひ合ひしてすれ違ひ　同　同
淋しさに隣の子供借りに來る　神戸　南天棒
失職の父へ將棋を持つて行き　同　同
紺サージ光りだしたが氣になつて　同　みねを
いつ迄も待つてる筈が子供抱き　同　同
最後迄笑ひ續けるのが妹　京都　文錢
翌日の日があるので嘘をつきました　同　同
母一人又も苦勞の燭をつけ　姫島　眠聲
新婚のこんな時まで湯がたぎり　同　同
貯める事着る事二人暮しなり　金澤　喜花
復習は凧の呻りに落ち付かず　同　同

五、又かゝ虎が寫眞機ながめて居　魚崎　柴舟
トリックゝ知らで驚ないて居り　同　同
下女の嘘云ひつけられただけを言ひ　螢ヶ池　花泉
朝鮮を出て日本へこわく住み　同　同
散髪屋風呂へ入らないなゝ思ひ　大阪　憲翠
子が泣いてからはいびきがふゝ止り　同　同
雪の町座敷歸りの妓に出遭ひ　小樽　吐松子
捨て水が日向の犬にぶつかゝり　山口　太洋
もう古い同行二人汽船待ち　大阪　戯多通
この上の慾に親類取り合はず　山口　白鷗
獸殺をしてはさつさゝ縫ひつゞけ　神戸　濁水

なる程ね文藝春秋の賣れるこゝ　同　徹坊
滿足も與へぬ癖に妬く女房　大阪　炭車
食堂車何處があくかゝ立つて待ち　御影　柳秀
思ひ出す事母親の小抽斗　大阪　三平
大通りコーヒの灯だけ殘り　神戸　卜水
さし上げて見ても笑顔を見せぬなり　大阪　蚊十
歸る兄無理に切符を握らされ　螢ヶ池　杏三
隔離室窓へ浮世の雲が見ゐ　島根　木屑
校友に取卷かれてる新夫人　大阪　深春
心から憎んでるよな人でなし　三重　笑郎

近作

麻生路郎

恩人は涙のこしただけのこゝ
死にゝもなかつたやろ娘のまゝで置き
新らしい後家はぶべつのなかに立ち
鈎革の外に意識はなかりけり
母の背で寐入る朝鮮人の子よ
旅へ出る人へゝりまく子の多し

句作上の常套語（八）

麻生路郎

（15）「やう」で止めた句

『やう』で止めた句を『武玉川』に求めたが一句も見當らなかつた。見落したのかも知れぬ。『柳樽』には、あるにはあつたが佳句に乏しかつた。

『やう』は『樣』であり、『如』である。或る事柄から想像して『さうかも知れぬ』とか『多分さうだらう』とか『屹度さうだらう』とか、『それにそつくりだ』とかいふやうな場合に用ひられてゐる。勿論さうした形容で句意の裏の裏までも響かせるところにこの用語の強味があるのである。

――昔の句――

どこで落したとは無理な尋ねやう

（ ）「凡槍してゐちやアれにか、一體どこで落したんだ」とは、よくいふ奴だが、どこで落したかハツキリしてゐれば、さつさと拾つて來る筈だ。斯うした理屈に合はない言葉が寛政の昔から大正の今日までいまだに繰り返されてゐるのも面白いではないか。句が生きてゐる所以である。

殊に滑稽なのは、巡査がいかにも眞面目くさつて、斯うした奇問を發してゐることである。人間はいつまで、こんな莫迦げた言葉を繰り返へすのであらうか。

雲龍は腹たちまぎれ書いたやう

（評）筆でなぐり描きをしたやうな亂暴さに見ゐる筆致を謂したのである。斯ういふ句は成るほどうまく云つてゐるなアと思ふだけで詩的價値は頗ぶる稀薄である。

親の氣になれとは無理な叱りやう

（評）子をもつて知る親の恩で、親の氣になれる位なら、はじめから極道はしない筈。穿ち得て妙。

匙加減しろうと目には惜しいやう

（評）漢法醫の匙加減を云つたもの、別に惜しんでゐる譯ではないがほんの少しを減したり殖したりするので斯く云つたのである。

店賃が濟んだか路次の叩きやう

（評）この句を讀めば、先づ第一にはドン〳〵と威勢よく路次を叩

いてゐる江戸ッ子の姿が眼に浮ぶが、次の瞬間には、その同じ人物が今までは店賃も碌に拂へず、たま〳〵遲く戻つても、いかにも氣兼して路次をたゝいてゐた光景が躍如として浮んで來るのであるかゝる對照に、作者は興味を感じたのであらう。

吳服屋の手代疊にはいたやう

(評)斯うした句の面白味が何處にあるのか、初心者には分らないかも知れない。しかし、この吳服屋は今の吳服屋ではない。三越の百貨店が越後屋と云つて、暖簾をブラ下げて、番頭手代がズラリと店先へ目白押しに並んでゐたころの吳服屋を想像しなければ、この句の味は出て來ない。

三分だけ格別いたいつめりやう

(評)穿ちの句であるが、たいした句ではない。寢暦の頃から吉原の全盛妓散茶女郎の晝夜の揚代金が三分であつたのだ。女につめられて喜ぶ男の心理さへわかれば句意は說明するまでもなからう。この女郎のことを又「晝三」とも云つた。

お前でもいゝこはむづい口說きやう

(評)下女を口說いてゐるところか。男尊女卑と、階級的差別と二重に卑しめた言葉であらうが、矢張り性慾の前には弱い人間であつたのだ。

——今の句——

船頭はまだ搖れて居る歩きやう　徹底郎
心配を親は勝手にしてるやう　一柳
宿引の平手は掬ひ入れるやう　蘆穂
鮨喰ふ鶴は火箸で挾むやう　竹人
あくる日は理性ばかりの人のやう　馬行
表から見れば舊家は留守のやう　のぼる
鯉幟竿を慕つて來てるやう　濁水
海の水押すな〳〵と云つたやう　松郎
朝風呂の流し場潮が干いたやう　盜泉
結界はあぐら組むのに置いたやう　しげる
船津橋いつもおんなじ船のやう　眠聲
金持を布子に見せた太りやう　路郎

(16)「し」で止めた句

『し』で止めた句は形式上『居』で止めた句『來』で止めた句と同樣であるが、『居』や『來』で止めた句のやうに佳句がない。『し』で止めた句は、調子がいかにもそぐはなくて、幼稚な句となることが多いから、なるべく避けて用ひない方がよい

——昔の句——

鍋鑄掛すてつぺんから煙草にし

(評)外の職人であれば、一ト仕事を終へてから煙草にするところを鑄掛屋ばかりは荷をおろすなり最初から煙草を喫ふてゐるのでそこに興味をもつたのである。事實は、かれの鎔けるのを待つてゐるのである。すてつぺんとは最初といふ意。

蟻ひとつむすめざかりを裸にし

(評)句意は說明するまでもなからう。「貞女にも帶を解かせる蚤一つ」といふ類句がある。

人柄へからかさ一本貸しなくし

（評）俄雨を避けて軒下にしやがんでゐる人がある。仲々羨れさうにもない。見れば相當の人品である。眞逆返さぬこともあるまいと雨傘一本貸してやつたが梨のつぶて。

仙人さまアと濡手でかいはうし

（評）久米の仙人が下界の小川で濯ぎものをしてゐる美女に見惚れて神通力を失ひ、雲の上から眞ッ逆さまに墜落して氣を失つたので洗濯してゐた女が濡れ手のまゝで走りより介抱したであらうといふ詠史川柳。

いゝ施主がついて命を火葬にし

（評）苦界の女が腕の入墨を炙で燒き消すことを詠んだもの。施主とはこの場合身受してくれる旦那のこと。

―今の句―

小遣ひがあるかと云へばお辭儀をし　松郎

いつまでも一粒種は子供にし　志貴南

偶に逢へばごうしませうを連發し　柴舟

幽靈より太鼓の音でびつくりし　信かず

ちらと見ただけで初戀安心し　吐露樓

泊り客わざと家賃にびつくりし　万よし

『し』止めの句は、古句にも、現代の句にもたいして見るべき句がない。ただ一句松郎の『小遣ひがあるかと云へばお辭儀をし』が光つてゐる。（終）

鯱鉾（欠本）讓受けたし

岡田三面子

日本に於ける川柳書の藏書家として知られてゐる法學博士岡田三面子先生が左記の雜誌に欠本のあることを申し越されましたから重復又は御不要の方はお讓りお下さるやう川柳家各位にお願ひいたします。各號全部でも一部でも相當代價にて讓りうけられるさうです博士のお所は相州葉山ですから直接お送り下さい（川柳雜誌社にて路郎生）

（第一卷）全部

（第二卷）第一號至第四號乃　四冊

（第三卷）第八號　一冊

（第六卷）第七號、第八號　二冊

（第六卷）第十號至第十二號乃　三冊

（第七卷）第一號至第六號、第八號乃　七冊

（第十卷）第二號・第五號　二冊

（第十二卷）一月號至十月號乃　十冊

本社忘年句會

十二月十九日夕
於端之坊

十二月十九日午後六時より本社忘年句會を端の坊に開く。年末にも拘らず盛會でありました。參會者は路郎、蹄二、文錢、苦可、光太樓、放馬、ひろし、かほる、亞板、醉夢、炭車、乾坤、塊佛、正坊、葉平、碧樓、突支坊、太平樂、山月、閒路、屏三呂、史朗、一柳、佳鳴、三次、文久、白山、三平、百雷、牛三郎、晴風、一路、月兎、松雨、史風、村雨、雲雀、紋太、鳶歩、馬行、松郎、水府、夢路、春三、波郎、萬よし、二柳子の諸氏でありました。尚散會後席を北むらに移し左記有志の下に忘年小宴を開催隱し藝續出で、談笑裡に明會いたしました。(二柳子記)

水府、雲雀、文錢、蚊象、夢路、乾坤、塊佛、亞板、葉平、一路、ひろし、路郎、松郎、松雨、放馬、かほる、月兎、馬行、萬よし、二柳子

兼題　掛取　路郎選

掛取の暮れて殘るは知つた家　月兎
掛取に傘の雫で庭が濡れ　放馬
そんな事掛取知つた事でなし　佳鳴
ほろい事云ふて〻掛も拂はれず　山月
直ぐ呉れた家で掛取恐入り　正坊
掛取へ暫し寒さを忘れさせ　しげる
すぐ呉れた家を掛取つゞいて　波郎
待たされて掛取半金だけ貰ひ　眠聲
掛取の歸れば水菜煮いてゐる　かほる
掛取に行けば新聞斷られ　苦可
受取へ凹んだ硯突きつける　鳶歩
掛取が坐つて了ふ紙幣の釣錢　春三
たび〳〵の留守に掛取赫こなり　文錢
掛取の遠い所に良い得意　光太樓
掛取のあこへ御免こ出前持　松郎
判取をする掛取を低く見る　百雷
お辭儀する程掛取は吠ゑられる　同
掛取の五日こたかをくゝつて來　蹄二
掛取の一錢合はぬまゝ納め　同
しんみりこ云はれ掛取腰を掛け　屏三呂
掛取の敷居を越せば低い腰　同
いつ來ても貰へる家で茶を呼ば　乾坤
掛取を去なして寒い部屋こなり　同
掛取に聞くこ彼奴は馘首に成り　馬行
資本家の庭へ掛取すぐ溜り　同
聲替り此頃掛け集めに出　水府
掛取の字が苦くなるいゝ調子　同
(軸)すぎ燒の家で掛取しまひ　路郎

席題　硝子　互選

何事か包んだやうに摺硝子　太平樂
帆を張つた樣に硝子屋持つて行き　醉夢
淋しさに硝子を少し曇らせる　光太樓
藥局の硝子の中で寒い音　ひろし
硝子越冷たい母の顏に見え　屏三呂
硝子屋のこ云はせそつが無く　かほる
わて居る硝子へ梅の紙を張り　山月
硝子戸に兒の遊ぶのを危ながり　亞板
ぜんざい屋硝子障子へ赤い文字　一路
運轉手硝子へ雨こ氣付くなり　聞路
硝子皆入れて普譜の手を離れ　文錢
硝子屋は科人こ云ふ姿で來　正坊
人通りに硝子一重の金時計　馬行
色硝子赤青赤に人が見え　碧樓
冗談が硝子戸へ來て負けになり　同
硝子越八つ手の伸びたのが見　史朗
ストーブが赤く硝子は曇つて居　同
硝子窓今日の寒さを曇らせる　乾坤
硝子越會釋の人を追つかける　同
恥しい顏を硝子でふこ氣づき　蹄二

幸な事には窓の摺硝子　同
硝子越魚は海の心算なり　塊佛
色硝子まで冷やかな朝歸り　同
硝子をわつて丁稚その日は逆ぎ　路郎
買ひもせぬのが陳列へ息をかけ　同

席題　厄年　紋太選

厄年も知らずに越した二十六　一路
厄年のまだ堂島を諦めず　塊佛
厄年の方の神籤が吉と出る　佳鳴
何事も厄年として諦めて　二柳子
馬鹿にしてゐても厄年氣にかゝり　一柳
厄ぬけがしたと全快祝はれる　苦可
厄年に買控えして羨まれ　正坊
厄年に金庫の位置がまた變り　屏三呂
厄年を監視の付いた氣で暮らし　馬行
厄年の膏藥貼るをたしなめる　松郎
厄年にうんと返事を決めた丈け　松雨
もう厄年ですかと符蝶の樣に云ひ　同
厄たつた事にしといて馬鹿もる　光太樓
厄年を貝平凡に暮すだけ　同
厄年と厄年無理に添ひたい氣　文錢
厄年へまあ〳〵〳〵と嫁の沙汰　同
(軸)同い歳君も厄だと聞かされる　紋太

席題　鍛冶屋　松郎選

ホコリ吹き〳〵鍛冶屋茶をおろし　正坊
でぼちんの黑い鍛冶屋の若い衆　かほる
フイゴから鍛冶屋都々逸と切られる　屏三呂
まつくらな鍛冶屋の土間へ明り　ひろし
溝の水錆びて鍛冶屋へ近ふ住み　文久
牛車鍛冶屋へ一寸寄つて行き　紋太
近所の兒鍛冶屋の午食遊びに來　聞路
火のうちに鍛冶屋叩けるに叩き　馬行
向ふ槌戀の火花か見ねまいが　路郎
鍛冶屋から火が出たやうに云ひふし　同

席題　箱乘　互選

徐行する場所を箱乘知つて居る　亞板
箱乘りも名古屋で降りる樣に云ひ　一路
淀川の音に箱乘立ちかける　春三
箱乘りは今朝の見送り人を見る　史朗
箱乘の今日は三度も富士を見る　鳶歩
箱乘が降りて驛前騷がせる　山月
箱乘りの方から見へる新鞄　三平
トンネルを出ると箱乘り寢てる　也光太樓
すれ違ふ驛を箱乘り知つて居り　百雷
箱乘と知らず一杯ついでやり　突支坊
箱乘の今日は別府の湯につかり　一柳
箱乘りと知れた騷ぎが驛に着き　碧樓
箱乘りは列車ボーイの名もおぼ　史風
箱乘りの西へ東へ草臥れる　乾坤
トンネルの數も箱乘り心得る　塊佛
箱乘があつたと靴を脱ぎ乍ら　白山
箱乘りと意氣投合の夜の驛　馬行
辨當を買ふて箱乘り乘つて來ず　文久
途中下車箱乘り連れになるつも　同
箱乘りは一番先きに寢て見せる　月兎
箱乘りは眼星をつけて席を占め　同
箱乘りのあふれたに京で降り　蹄二
箱乘りに道者の群が邪魔になり　同
箱乘りの前へわざ〳〵かはつて來　夢路
箱りの切符の無駄が溜つて來　同
鐵橋から箱乘り飛んで見たくなり　かほる
箱乘りの新婚旅行へ一寸燒き　同
箱乘りも驛賣を呼ぶ用はあり　雲雀
箱乘りが仔細げに讀む時間表　同
首卷の中に箱入り眼をつむり　水府
箱乘りも靜岡はつい夢のうち　同
箱乘りが突然降りたあとのこと　紋太
箱乘りの執念深い一等車　同
箱乘りは便所の邊で捕へられ　路郎
箱乘りもおんなじやうに眠くなり　同

漫畫 對照

吉田きよし

護られる店 追はれる店（百貨店前）

『鳩ポッポ〳〵サアごんなお子達でも此の樣にして頂けば面白くいごきます』

『サアア買ひなはれ、こんな大きい風船が十錢です、お子達によい土産になります』

巡『オイー貴樣等は又來て居るな、交通の邪魔になると云ふに解らないか』

川柳書架（一五）

新興川柳詩集

（田中五呂八編著）

▲例によつて序文を抜きたいと思ふが本書の序文は井上劍花坊、川上日車、古屋夢村、白石維想樓、島田雅樂王、森田一二の六氏が何れも相當の長さでもつて書いてゐるので、この小さな紙面にとても發表することが出來ないから省略することにした。しかし、これ等の序文は何れも本書の内容を見ての序文でなく、編纂者たる田中五呂八氏の從來の態度その他によりかゝれたもので寧ろ序文といふよりも新興川柳に對する各自の小論文ともいふできもので。この序文だけでも讀んで見る價値はあらう。巧妙なる序文の作製

護られる者追はれる者（金持の家）

巡『オイばさん』

乞『ハイお有難うございます』

巡『有難うぢやない、こんな所で寢てはいけない、早くあつちへ行け』

『おつ母あ、こわい！』

こいふべきものもあれば、序文によつて自己を語つてゐるものもある。

▲巻末に「編輯後記」なるものがある「私と川柳」「川柳革新運動の概觀」「新興川柳短見」「最後に」の四項に別ちて編者が川柳に入つてから今日に至るまでのことを叙説してゐる。

▲大正十四年十二月二十日發行。四六版二一六頁。編者後記一二頁。定價金壹圓參拾錢。發行所は小樽市稻穗町東一丁目七番地氷原川柳社。

▲本句集の内容は氷原其他の革新系の雜誌から拔いたものでありながら純然たる革新派にあらざる人々、即ち革新派の句に全然無理解の人々の句をも多少混加したるを編者のために惜しむことは云へ、斯界の寶典たるを失はない。一讀を薦む。

本來の義に還れ

川村花菱

創作全盛の時代に對して飜譯全盛の時代があり、長篇萬能の時代に對して短篇の天下が來る。歌舞伎劇全盛に對して新派の黄金時代がある、女人の技巧に心醉する事にあきて、素人の劍劇に見物が蝟集する――これはみんな自然の勢ひで、この時潮に對して反對するものは常に滅ぼされて仕舞ふ。正しき批判と云ふ事は、永遠に立派な事であつて、そして常に力なきものである。いかに藝術の創作にその生命ある事を絶叫しても、社會が泰西の飜譯を歡迎する時に、この正しきさけびも何にもならない事になる。が、時は滿水、人の趣向は移り變つて、やがて又識者の先見が具體的になつて來る。その時社會は、先見の明に對して尊敬する事なしに、自分自ら作り上げた時代の相であるこ言つて居る。

生々しい印象とこれを表現する力とは必ず動的なさわがしいものでのるに對して、多くの體驗から來る深き批判の聲は、いつも物靜かで深いものである。若い人々と既成大家との對照は卽ちこのすがたの對立であつて、大人氣ないと云ふ心持から來る沈默は、若い人々から見てうち敗かされた事になる。

文壇劇壇に於てこの事は常に繰かへされて居るやうに、川柳界に於ても同じ事である。これは要するに、絶大の權威ある作家の出現に由つて統一せらるべき事であるが、絶大の作家を生むも生まないもそれは時代の力の然らしむる所で、文藝春秋的ゴシップ式編輯に能事了れりとして居る時に、怎して大きな作家が生れ出る譯があらう。

大正十四年の川柳界は、二ツの大きな流れを作つて居て、一ツは、現代まる出しの人のわるいゴシップ文藝に走らうとし、一ツは全く時代に脊を向けた古句研究の一團であつた。

前者の行きつく所は低級なるジァアナリズムであつて、後者の終局は趣味の範圍を脫する事なく、共に藝術の彼岸とは極めて遠いものであつて、到底川柳の生命をゆだぬべきものではない。

が然し、私は怎ふ云つたからと云つて、兩者の存在を無暗に否定するものではない。これ等を否定するものではない。これ等を否定しやうとするならば、先づ時代そのものを否定してかゝらなければならない、何故ならば、前に云つたやうに、ゴシプ川柳も古句研究も共に時代の生んだ一つの流れであるからである。

ジアナリズムの川柳はしばらく措き、古句研究の事について考へて見るに、古句研究と云ふ仕事は實に偉大な事であり、我が川柳界に於て最も尊ぶべき一つのものである事は事實であるが、古句研究を以て川柳の能事了れりとなすに於いて、又、古句研究の興味がいたづらに好事家の生活と何等相去る事なきものとなるに於て、尠しも値なき事である。悲しいかな、大正十四年の古句研究の一團は、二三の者を除いては、低級な骨董趣味を脱せずして、老後のなぐさみと云ふ域を出でないものが極めて多かつた。

およそ、藝術は、鑑賞によつてその價値の定まるべきもので古實を詮義し、由來を尋ねてはじめて意義あるものではない。古美術はそれ自身貴くなければならぬもので、由緒を尊び云ひ傳へを云々して評價を高くする事は、藝術鑑賞の立場にあらずして、骨董を所持するものゝ物慾と誇りとから生ずる變體の趣向である。それと同樣に、川柳の古句研究も古實を調べ、句の由來を極め、知識的解説に由つて學び得る興味は眞の藝術鑑賞の立場でない。

古川柳の價値は、古川柳の存在それ自身の價値であつて、その中の名句の數字の上の積み重ねではない。要するに川柳の藝術的價値は、一句の價値に由つて上下せらるべきものではなく不可解な句を不可解のまゝに殘しても猶川柳の價値は動搖するものではない。反對に不可解なる古句の由來が全部解決せられたにした所で、川柳の價値はこれ以上特別に向上するものではない。即ち藝術の價値は、發見に由つて現れ、解釋に由つては生命づけられるものではない。發見とは、創作を感ずる心であり胸であり、決して理智の力ではない。

繰返して云へば川柳の價値は、川柳全體の存在の價値で、その價値の根底は、古名句に由つて俟たれるもので、古名句は、永久に衆民の心と語り胸と響き、平易にして極めて内容の深いものである。

恁ふ云つて私は、古句研究を決して無用視するものではないむしろ、二三の特殊研究家に對しては、常にその努力の容易ならざる事を感謝して居るものであるが、私の云ふのは、時代の波にひきづられて、古句研究に扁執し、單に好事的興味に沒頭して、本來の事を忘れ去るの人々に慊らなく云ふのである。

然らば、川柳本來の立場はいかなる所にあるかと云へば、勿論鑑賞と創作にあるべきである。創作なき柳界は、何等の權威なきものである。

近代に於ての川柳の發展は、古句鑑賞と創作に由つてはじめられ、その眞の力は常に創作に由つて現はれて居た。

大正十四年は、古句研究に力を大半を費されたやうに思はれる。新なる句は、本來の義に還つて、力ある創作と、あやまらざる古川柳鑑賞の時代になつてほしいものである。（大正十四年十二月十一日）

言ひたい事

井上刀三

偶然の機會から素的な川柳が生れたり、或物へ或る奇嬌な或物を搗き加へて幸詩型をなした者が川柳として、やんやと囃されたりする。苦心慘澹腦味噌も枯れよとひねり出した川柳が、川柳として何等有難い者でなかつたり、日常會話の刹那から立派な川柳が生れたり、慌しい電車の中で悠々七八句の川柳を造作もなく物にする事があるかと思へば、机上數時二嘆して得た川柳に自分乍ら口惜しい程貧弱な句しか出來ぬ場合がある。斯うした現象は、句作に對する錬磨と度數を踏む度毎にだん〳〵少くなるのだらうと、始めの中はあまり苦にもしなかつたが、皮肉にも昨今は、餘計にこの現象がひどくなつて來た。

困つたと云ふよりも、一層川柳を止さうかと思ふ程不愉快である。

◆

ある雜誌で兩刀使川柳家を極端に罵倒してゐたが、その色彩の比較的顯著な僕は幸課題吟と一家吟との區別より論じた明論と言へば明論の樣な、誰やらの論說によつて、わずかに救はれてゐる形だがこれ亦頗る不愉快な事なのである。兩刀使とは、朝に進化川柳を作り夕に丁髷川柳を作るの謂で、僕の樣なのか最もよい見本らしい。それは試みに一家吟に於ける僕の川柳と課題吟に於ける僕の川柳の兩者を見れば、餘りに明瞭に判る事なのである。自分は以前からこの淺間しい洞ケ峠の光景を、自分で叱責しながら、ごれ程惱んでゐるか判らないが、扨て課題吟に臨むと、古川柳の持つ獨得の、常套語を不覺にも失敬して、句會の空氣に妥協せんとし、且愛すべき一種の競爭心が本能的に自己を暗愚に導くので課題吟に於ける、僕の川柳は、僕に言はすれば、少しも有難くない一時の間に合せと言ふ事になるわけである。

◆

古い川柳家なるの故を以て、我々は徒らにこれを先輩として見る事は、出來ない或る時は川柳に忠實であつた先輩、或る時は名句を吐いた先輩、後輩に親切であつた先輩なるの故を以て、我々はこれに本當の意味の先輩として遇するのはあまりに早計ではあるまいか。實質的に於ける先輩所謂我々が滿腔の敬意を表さなければならない先輩とは、現在川柳に可なり忠實な川柳家であらねばならない、而して頭のいゝ常に名句を吐く川柳家でなければならない。軍人や政治家は年功によつて、定時進級があつたり、勳章を貰つたり、爵位を頂戴して、醜い殘骸をせめても飾つてゐられるが、川柳家は年功

や金や、薄つぺらの雑誌を出してゐる位では、そうはいかない。川柳家は川柳家としてのいゝ頭が何よりの財産であり、武器であり、名譽である。この點から論じて、我々の眞の先輩として尊敬すべき、先輩は試みにリストによりチェックを進めてゆく内其のあまりに少き事に喫驚せざるを得ない。言ふまでもなく先輩を敬する事は美しい事であり、是非そうしなければならない事だ。しかし我々は年月から見た先輩、居眠つてゐる先輩、よく選をしてゐる先輩、柳樽を澤山持つてゐる先輩などを必ずしも隨喜の涙をこぼしてまでも崇拜する必要は更にないのである。

◆

川柳は、つまらないと云ふ言葉を川柳家から聞く事がある。つまらないと云ふ意味は川柳の價値を云々するのではなく川柳を作る事が徒勞であると言ふのである成程よく考へると川柳をやつて行く程つまらないものはない。幸ひにして日本一の大家になつたとしても、御承知の通り實につまらないものである。それでも少し川柳が小說の樣に一般的のものになつた曉はいざ知らず今日と言はず當分は川柳では、飯が食べられ相にもない。けれどもこれ丈けの理由で川柳を止す人があるなれば、あまりに馬鹿である。そんな人は一べん冷靜に考へてみるとよい。もこを洗へば、唯平凡な機會から川柳に面白味を感じたまゝ作つた川柳が兎も角活字になつた嬉しさから、今日迄ずるゝ引つ張られて來たのではないか。無難しいとか何とか云つたつて、川柳程樂に作れる詩は他にあるまい。雜誌に若干自分の句が掲載されたりすると何でも文士になつた樣な氣持で、今更川柳がつまらないなんて、巫山戲るのは、あまり蟲がよすぎはしないか。

◆

今ではもう平氣だが、川柳が少し作れ出した頃社會から川柳を馬鹿にされてる樣で、癪で堪らなかつたものだ。ゴシップ一つ讀んでも『何々……』川柳子は全くうまい事を云ふなんて調子で全く輕視してゐるし、殊に落語家などは、笑はす材料にまでわざゝ川柳を失敬する樣な有樣でひそかに慨嘆せざるを得なかつたものだ。さうかと思へば、相當物の判つた奴までが、川柳と狂句とを同一視したり、或友達などは川柳をまるで骨董扱ひにでもしてゐるのか、君にして川柳とはあまりに矛盾ぢやないかなんて言つたりする。甚だしきは川柳なんて呼ぶ代物があつたりして、斯う云ふ先生には幾何川柳の沿革と價値を說明しても、てんで耳を貸さないのだから實に口惜しくてならなかつた。しかし今日になつてこんな事を言ふのは自ら皮肉がつてゐる樣で嫌だが、川柳も略底が見にたし、殊更藝術なんて思はなくなつたりして、こんな事にもあまり問題にせぬ樣になつた。考へてみると、文藝春秋に某川柳家が貧弱に照會されたのを自分事の樣に喜んだり、博士が偶然川柳研究家であつたりした事に、充分滿足と感激した時代の方が遙に懷かしい。

募集句

大根

新妻の手に大根は長く見ゐ　深春
流れて〳〵大根大根で押へられ　月兎
新嫁も大根引きの頃となり　笑郎
大根を踏んで猪やつと捕れ　南天棒
大根をまぶしゆう見せる船世帯　三平
喜びの雨に大根伸びる事　史朗
秋晴に大根賣の聲高し　ト水
臺所の隅で大根皺がより　三次
姑の口傳大根漬けて見る　無心
初雪の中に大根青く見ゐ　憲翠
刺身皿おろしを富士の形におき　美の作
新開地大根挾んで家が建ち　炭車
大根賣煮ゐない愚痴をきいて賣り　花泉
大根菜のしなびて寒い寒い朝　白鷗
天麩羅屋大根をろしに人一人　柳秀
自動車で大根運ぶ木津となり　突支坊
大根にだん〳〵寒ふなつて來る　一休
赤てがりに若さの見ゐる大根畑　太洋
大根を洗ふ女に石を投げ　拔天
ヂアスターゼなぞと大根食つる　逸錢
福引に大根が當る賑さ　聞路
看板にされて大根の曲線美　木屑
誕生日母が大根きざむ音　一路
大根を三年斷つて繪馬をあげ　山月
まけておきますと大根庭へ入れ　蚊十
御會式へおらが今年の大根なり　万よし
濁酒と大根なます　村の衆　吐露樓
大根の畑殘して冬となり　同
大根をなまでかぢつて驚かせ　靜雲
大根は漬物桶にちぢこまり　同
買込んだ大根に寒い日が續き　馬行
小川から大根は賣れる色になり　同
(佳)辻斬の氣味で大根葉がおる　同
大根が〳〵ろ〳〵養ゐて冬が來る　逸錢
蟷當の中につめたい大根煮　一路
其の料理大根と見ゐぬ板場振　眠聲
けつたいな靴を穿いて大根賣り　一休
櫻島嫁と大根もよく肥り　美の作
大根の干場に淋しい日があたる　無心
ほろふきの味へ一本つけて呉れ　憲翠
(人)大根炊酒一合に醉ふもよし　白蝶

川柳家の戸籍調べ

□　係　馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(57)　田中吾呂八

(一)田中次俊(二)吾呂八(三)なし(四)小樽市稻穗町東一丁目七番地(五)明治廿八年九月廿日(六)なし(七)自分と異ふ素質の人の句、芭蕉の句、萩原朔太郎の詩(八)もとは誰でも好きになれたが、目下女房が一番よい(九)四五十句ある(一〇)釣魚、碁(初段五目)、將棋、(へボ)撞球(八〇)柔道(三級)、撃劍(五級)藤八拳(自信あり)寫眞、喧嘩、その他道樂時代の惡趣味多々あれど五六年來改心して目下晩酌一本と讀書(一一)有れど見なきを淋しむ(一二)一寸思ひ出せず(一三)大正六年春。

(28)　布部幸男

(一)布部幸三郎(これは知る人少し)(二)幸男(三)春樹綠太郎と云ふ名を一頃使用しました(四)京都市木屋町四條上ル(五)明治卅四年二月十八日(六)印刷業(七)近頃見た句の中で「封切れば小判百兩のび

(地)大根の白さハツキリ朝になり　柳秀
(天)千大根縄梯子程軒にかけ　美の作

手袋

手袋は揺るに惜しい指の穴　深春
手袋をキッチリはいて縁遠し　万よし
手袋のまゝ思はずも手を叩き　蚊十
ストーヴのこゝへ手袋ほつされ　吐露樓
一週忌この手袋も姉の品　眠聲
手袋を片つほはめた炭俵　一路
手袋を取つて荷造飯にする　のぼる
手袋もはめて名残のまだつきず　白鷗
手袋の穴へ淋しく爪が伸び　千鳥
手袋のまゝ銭持てば便りなし　静雲
手袋に手袋握手してゐなり　三平
手袋を二つしてゐる紙屑屋　聞路
姉妹と見えて手袋同じ色　同
ショールついで手袋買せられ　白螺
トンドしてもう手袋を忘れてる　同
手袋は敷島を買ふだけを持ち　史朗

石屋

面白い名前と石屋思ふなり　史朗
石屋では未だ神佛は雑居なり　突支坊

軸（舊作）

劍劇の洒落は大根を切る如し　春雨

矢田右大臣選

荷造をする手袋を買ひに來る　同
車掌今日新の手袋はめてゐる　花泉
ゴム手袋をこつて下女あたりに來　同
曲りかけた釘に手袋口で脱ぎ　馬行
手袋の矢張り五本の指がつき　同
手袋の時の拳固は強う見え　同

佳

手袋に其人人の色を見る　杏三
手袋を編む程看護樂となり　無心
三頁　四頁　手袋困り　吐露樓
手袋の今日は冷たいことを言ひ　聞路
口で取る手袋荷物持ち替へる　同
ミットちと手袋といふ氣味もの　静雲
手袋に息吹かけて見るも冬　同
手袋をして荷造りへ一人殖ね　馬行
手袋の手は會社まで用がなし　同

高橋古城山選

墓値切る人を石屋は可笑がり　のぼる
盗まれる心配のない石工小屋　普天

をする」と云ふ句に感心しました(八)こいつはお任せしませう(九)作る句皆自信ある句です。多作しませぬから作つた句全部に責任を持ちます(一〇)これといふものもありませぬ(一一)ございます、早婚の方でした(一二)あきんど(一三)私が十八の年でした。

(59)　徳田双柳

(一)徳田進俊（坊さんの名のやうですがハブトシと讀みます(二)双柳(三)薫石、史窓、雅龍(四)大阪市住吉區安立町五丁目一二二住吉吟社とした看板を掲げて居ります(五)明治三十五年六月二十五日(六)設計製圖、筋引いてないぼといふ奴(七)「戀猫を本氣でおごす二階借」「ほんとうに惚れてゐるのは遠く坐し」等のやうに色氣たつぷりのが好き(八眼のパッチリと開いた色の白い、少し肥氣味のおとなしい方で桃割位結ふ床しい女だが、さて海のものとも山のものとも分らぬ、目下物色中、ごなたか袴はいて呉れやうと云ふ人はおまへんか(九)残念乍ら持合せなし(一〇)創作、歌劇臺本、著作、音樂(一一)今有りませんが、國勢調査でしたら半丸位の所(一二)別に嫌ならのではないが近頃流行する耳隠しの女は感心しません、と云ふのは最近しつこく追ひかけられて閉口したから(一三)大正十年頃

雨降うが風吹こが石屋半氣なり　炭　車
打ち壞はすやうに石屋は調刻し　靜　眞
灯が點いて石屋山からトりる也　光　朗
二間ほど離れて石屋との話　吐露樓
棟上げの日までと石屋せかされ　憲　翠
催促に行くと石屋は粉を飛ばし　寢多樓
出過ぎると石屋女能振り上げる　白　灣
遠くから見ると奇麗な石火花　逸　錢
復興の町に石屋の槌の音　南天棒
見付けものしたと石屋川へ降り　仰天子
手水鉢石屋一月はごかゝり露　斗
折々は石屋鍛冶屋の音もさせ　濁　水
先代の御恩石屋は念が要り　幽　里
夜通しで石屋のかゝる道曹請　案山子
測量に石屋後からかしこまり　山　月
靜けさを破ぶる新開地の石屋　一　聲
裏一杯石屋は石を列べて居　辰進子
大書家を少しけなして石屋彫り　迷　犬
女能があるので石屋乘り遲れ　眠　聲
川荒れの後に石屋の仕事殖へ　笑　郎
あぶれてる石屋は地尊ゞ彫り　枝　呂

海　軍

◇　刀三選

海軍へ一人の母と許嫁　悟郎
丹念に研く石屋に日が永い　天花
手水鉢石屋の門で苦かつき　素生
渡さない橋に石屋の小屋が建ち　同
新築の庭へ石屋を呼ぶ暮らし　乾坤
大掃除庭その儘に石屋暮れ　同
奈良朝の石燈籠もある石屋　万よし
庭石のほかに石屋のよい植木　同
墓供養今日紋服で石屋來る　白蝶
要塞のやうに石屋は積み圍み　同
高麗犬が石屋の軒を狹くする　青彫子
晒し屋が石屋の影を躍らせる　同
宿替をした事のない石屋なり　聞路
生きものゝ樣に石屋は押へつけ　同
仕事場の石をの儘に石屋去に　夢遊
肩の凝る音で石屋の日が永し　同
しつこうに見てる石屋叱り付け　同
(佳)もう冗談を云ふ石屋に黃昏れ　多聞
(佳)夜業する石屋へ彼岸近くなり　天花
(佳)手をやめるまで石屋に近寄れ　枝呂
(軸)石屋にはち、迷惑な花吹雪　古城山

井上刀三
高橋かほる共選

海軍が來てから威張る居留民　突支坊
水兵の服で故郷の短い日　蚊十

誓、やつた事あり、その後まもなく復活

(60)　平井光太樓

(一)永井享藏(二)平井光太樓(三)いとまろ、斗南、源氏(四)大阪市外大軌沿線布施町荒川二〇三(五)明治卅二年七月二日(六)マアー電氣かなア(七)「借りても金は面白いやつ」(八)下町風の內氣な娘(九なし、これから(一〇)續書、ザル碁、野球(見るだけ)(一一)有り兒一人(一二)喋べり廻る川柳家(一三)大正十一年春。

(61)　横田眠聲

(一)横田慶三(二)眠聲(三)方眠(亡父の雅號をそのまゝ)(四)大阪市西淀川區姫島町五二一の一〇號(五)明治卅一年六月三十日生(六)阪神電車改札係(七)「少女藏の壁へもたれる癖がつき」「路郎」「巡禮の子が敷島の殼を蹴り」「菩穗」「灯の搖るゝが風の姿なり」「日車、總じて哀愁の帶びた句が好きです(八)桃割に結つた下町風の女しんみりと　て(ヒステリーでなく)黑案に耽つてゐるやうな女(九)是と云つた句はありません、然し活字になつて出るとそれがなんとなく嬉しいものです(一〇)歌舞伎(一一)なし、どうか好いのをお世話願います(一二)おべつか、あまり輕々しい事(一三)大正十三年一月頃川柳雜誌社神戸支配第一句會から。

(62)　井上刀三

海軍に四年布哇の土も踏み　白蝶
海軍へ國の便りが一かため　聞路
海軍は楠公さんの鳩を寄せ　史朗
この國の歌を海軍覺えて來　吐露樓
海軍になると云ふ子が舟を畫き　同
海軍旗今日はダラリと春霞　万よし
御次男は海軍と聞き舊藩主　同
敵艦に一際黑い煙を吐き　馬行
荒れが鎭まつて水兵國へ宛て　同
(佳)海軍の一人は痩せた奴を連れ　三平
海軍は無駄な航海續けて居のほる
海軍へ白いづくめの夏が來る　一路
君が代の歌で揚げた軍艦旗　同
本艦へ惚氣をみんな持ち歸り　馬行
太平洋泣く水兵を見付け出し　同
(軸)艦長が憂鬱になる世界地圖　刀三
水兵の力がすぎた春霞　同

◇　かほる選

士官次室或日巷子に行く話　萬よし
江田島へ江田島へ海軍の玉子　月兎
海軍へ白ひづくめの夏が來る　一路
海軍に四年ハワイの土も踏み　白蝶
海軍が來ると廓のさんざめき　突支坊
海軍はヅボンが歩く姿なり　のほる
海軍は海の廣さをふと思ひ　憲翠
海軍は楠公さんの鳩を寄せ　史郎
停車場ちと海軍の脊が高し　三平
海軍に取りまかれてる好い女　同
本艦へ惚氣をみんな持歸り　馬行
薄墨のやうに艦隊碇泊し　同
(軸)海軍は新聲劇を見に這入り　かほる
海軍が清水燒の猪口を買ひ　同

各地柳壇

松郎編

万よし川柳

平凡、交叉点　馬行選

(天)交叉点廻す電話で聞き合き　一路
(地)平凡な服に非凡をつゝんで來　ひろし
(人)交叉点やつと向ふの顔が見に　月兎
知つた顔寄るゞ變つたことを問ひ　戯多通
抱いた兒の首踊らせる交叉点　同人
平凡な道を學校かち歸り　憲翠
交叉点少し溜ると笛が鳴り　同人
平凡を脱を切れない子　澤山乾坤

(一)井上富之助(二)刀三(三)懸賞なぞの悪戯をする都度出鱈目な號なぞをつけるだけで定まつたものはない(四)北區老松町一晩田方(五)明治卅五年十三月十二日生(六)會社員(七)澤山あつて枚舉に遑がない自分の句にも他人の句にも(八)稍々蒼味を帶びに如何にも理智的な相貌眼は鋭迄聰明に輝いてゐる毛は黑いショールのあたりに戰し彼女は今汪意深い眸を歩行の彼方に投げてゐる……こんな異性に何時も憬れてゐる(九)可なり澤山あるのでどれをあげてよいか判らない(一〇)勝負事と言ふ勝負事は何でも好きでこれをやつてゐる刹那は實際生甲斐のある樣な氣がする(一一)ありません(一二)一一はあげられないが食物には殊にこの嫌なものが澤山あるので困る其他じはサラリーを吳れる人汚い裝をした人間學生時代のローマンスを何時も語る代物自分の美貌を極端に信じてゐる女垢抜けのせぬ洒落あはれみの忠告(一三)十二年十二月○。

柳壇ゴシップ

▲今日1と2と5と10が寄つて句を作りました。と云つて來た者があるので誰かと思つたら、一路と二柳子と十字路と悟郎。

▲馬行が十字路から紹介された短册屋にはいゝ娘さんがゐる。以後馬行の短冊箱にさらの短冊が溜ること。たまること

平凡な中に入婿年を取り　同
葬式を平凡に見る寺男　塊佛
交叉点乗換までの雨に濡れ一路　平凡な話を名士して歸り飯山　平凡な二人の中へところゝ汁破長
（軸）平凡の父にしてこの立志傳　馬行

多忙、朝寢　溪花坊選

（天）その朝寢はつい見た置時計　馬行
（地）父の出て行く音朝寢聞かれて　松郎
（人）忙しい店を日傘で娘出る　なみらふ

五　容

忙しい中にわるさの兒を見付け　しげる
忙しい中へ講參りの知らせ　のぼる
金借りに來て忙がしいことを見る　松郎
段梯子朝寢の足へ冷たすぎ　なみらふ
飯臺を廣ふ朝寢の飯がすみ　聞路

◇常綠吟社新年句會　紀伊妙寺町

（一月一日小集）　無空報

炬燵

孫の守する姑の炬燵にて　無心
奉公のつらさ炬燵の火が消ゐる　同
眼醒しを炬燵の中で聞いてゐる　玉仙
打ち解けてからの間の炬燵なり　同
歌がるた讀手の役は炬燵にて　柳聲
此奴めと炬燵の猫をつまみ出し　十世
賣炬燵君は子供に事を寄せ　庚子
熟爛は炬燵を臺にして向ひ香月
置炬燵算盤持つて差向ひ無空

◇天滿偶會（一月二日）　悟郎報

船長と云ふのが見えぬ寶船　一路
寶船もう龍宮は見ねかくれ　同
寶船銀のかもめが寄つて來る　同
寶船もう元日の朝となり　二柳子
寶船花火線香に驚いて　同
船頭はまだ來て呉れず寶船　悟郎
寶船おつとあぶない浪が來る　同
書留にして安心と云ふ姿　二柳子
書留をあてに二階は日を送り　悟郎
寄宿舍へ書留が着く日なりけり　十字路
親孝行もう書留の着く時分　一路
書留に文は讀んでも讀まいでも　同
十一時もう賣切れの戸がしまり　二柳子
賣切れの是は如何のお世辭ぶり　同
賣切れは次に來る日を聞いて去に　一路
賣　初れ申候初日なり　同
賣切つてそこらあたりの塵を見る　十字路
賣切つて財布しつかとしめ直し　同
賣切つて見上げる空に走る雲　同

讀者の天地

▲私が川柳雜誌を愛讀致しましてから早や一年の星霜が過ぎました。私等初心者のために川柳講座を開かれたらどうでせうか。さうすれば川柳を解する人も多くなるだらうと思ひます。又初心者も早く上達する事と思ひます。「讀者の天地」欄を新設されたので私は早速私の希望をお願ひする次第です　三重柘植、笑郎生）

△川柳講座もやりたいのですが今のところ雜誌以外に事業を大々的にやるだけの經費が許されないのです、當分は紙上の柳話、研究などで辛棒して下さい。（係）

△句會はちよい〳〵あるやうですが、何處かで川柳に就てのお話を聞かせて下さるところはありませんか。（寶塚、洋々）△第一日曜柳談會といふのを路郎先生のお宅で毎月開かれるさうですから出席されたらどうです（係）△川柳雜誌の創刊號が欲しいのですが讓つて呉れる人はないでせうか（福岡市、榊泉柳々）△川柳家戸籍調べ」は何か規定があるのですか（朝鮮釜山、鯛三）△特別に規定といふものはありません。お互ひ川柳家が親しみを

◇大晦日偶會

餅搗きのほんに舊家と云へる庭　馬行
餅搗きは奥の方から指揮を受け　同
餅搗きのおうと答へて入れ替り　同
餅搗きの騒ぎを猫は不思議さう　同
賃搗屋火の子落して通り過ぎ　二柳子
掛取も一臼搗いて歸るなり　同
餅搗にふと柳翁を思ひ出し　萬よし
居候今日はしやいで餅を搗き　同
一臼は吹雪の中に出來上り　同

◇悟郎庵偶會（一月四日）　悟郎報

鶏を追馳けてゐる高い下駄　馬行
鶏の哀れ倒さに値が決まり　同
かしわ店も騒がしい一重ね　同
鶏の鳴き眞似をして鶏屋死に　同
餌を忘れられた鶏屋の店の隅　同
かしわ屋の近所最期を見屆ける　同
口入屋氣隨氣儘をたしなめて　同
お目見得を後ろに喋べる口入屋　同
二番鶏三番鶏と朝になり　十字路
水枕もう鶏が鳴くだらう　同
口入屋そんな噂を聞きは聞き　同
口入屋その決心へ口を出し　同
病狀はどうであらうと鶏の聲　悟郎
口入屋今夜は泊める氣で話し　同
銘仙で結構だすと口入屋　同
上玉と顔へは見せず口入屋　同

◇松郎居隅會　（一）

判つてゐますと情婦へ口答へ　刀三
金線雀には代えられぬ情けだった　同
淋しいから恵む心と知られたり　莢豆
被害者に醉はせてくれる友が　同
裾切れた儘に情は受けまいぞ　松郎
深情雀が鳴いてゐるわいな　同

（二）

噴水のしぶきはつきりアーク燈　悟郎
故郷は遠し噴水高く飛び　十字路
噴水を前に遠慮のない二人　同
噴水の鯉か沈むと曇つて來　刀三
噴水のしぶきに濡れて用もなし　同
噴水へスターの一人立たされる　同
噴水を素直に浴びた裸体像　馬行
父を意識して噴水へ兒を連れる　同
噴水へ惹きつけられた樣に立ち　同
噴水を一廻りして話しかけ　松郎
善後策の窓噴水の風を受け　同
噴水へ枯葉は音を立てゝ散り　同
無雜作に解くネクタイに皺が見る　十字路
ネクタイが眼に付く程にて來る　悟郎
ネクタイを妻は背伸びをして直し　同
ネクタイを替へてグラスの酒の味　松郎
ネクタイへ朝の曇りを他所にして　同
ネクタイと眼鏡あしたの朝を待ち　刀三
廻る氣が今日もネクタイ替へ出る　同
ネクタイを辭令と共に買つて來る　同
ネクタイが堅くしまつた早い朝　馬行
ネクタイへ左手が行く立話　同
ネクタイの新らを同僚見逃さず　同
ネクタイを替へて一日救はれる　同

深めるために載せてゐるのですから、眞面目にさへ書いて知らして頂けば紙面の容す範圍で發表いたします。（係）△昨年中は一方ならぬ御世話に預り又本年も御高敎に預り度陽春の喜びと共に御願申上舛其の後は毎日怠らず柳句を作つて居ります私の地方に北信新報といふ新聞がありますがそれに川柳欄がありますので私も相當投句して居りますが其の都度面白なつて來ます。本年も私の地方の新聞の三、四社の新年文藝へ川柳を投句しました。それが本日發表せられ一新聞社の方は一等に入賞し又一新聞社の方は十等賞に入賞しました外に選外佳作が二句程ありました。元旦早々此の目出度い又名譽？なるは御社の雜誌と麻生先生の御蔭と思つて一層やつて見たいと考へて居ります。麻生樣此の信濃の山奥に住む我等靑年を川柳のために導き敎へて下さい特に御願申上げます。（長野縣、北澤高峯）▲同人でなくても原稿は載せて貰へますか（東京、樂太生）△同人でなくてもかまひませぬが原稿を拜見し直上でなければ分りません（係）「讀者の天地」欄投稿歡迎!!

隨筆 裏と表

蛭子省二

▼相の山

古句の調査に没頭してゐるこ、アバタもエクボに見にて、兎角惚込み過ぎ、同情も易くなつて、案外なツマラヌ句を賞めそやす傾向がある。此の病弊は自分許りでなく、先輩連にも往々見受けた。柳樽一册七百五十有餘句中川柳詩として、後光をさす程のものは決してザラにあるのではない。

江戸同道財布をはたく相の山
相の山天保錢で八ッあたり
相の山手しやな女の居る所
相の山神たう流で錢を受け
相の山波のつぶては江戸氣性
玉へなげさでにすくはす江戸道者
拔打にお杉お玉へ錢つぶて
ありつたけお杉をなぶるはした錢

こんだ目にあひの山だこから財布
江戸氣性ひしやくの錢を撥へすて
江戸ッ子が投げたで伊勢の玉に疵
面白く錢のなくなる相の山
蒔く錢をたまには疵のうけそんじ

狂句も含むで居るが、斯く陳列しても財布をはたいて求めようこする句の少い事は、御同感であらう。

江戸者でなけりやお玉がいたからず

此一句は自分の好きなもの、そして名吟には見逃すべからざる深い招蒂がある。西鶴の織留に

『間の山の乞食むかしは遊女のごとく小袖の色をつくして、味噌こし提たるもをかし。其すがたには似ざりき。中にもお玉お杉とてふたりの美女あつて身の色を作り三味線を引きならし、あさましや女のすゑこ伊勢ぶしをうたひける、毎日の

參詣あだほれをして爰に立ちごまり、前なる眞紅の網の目より、貌のうちをねらひすまして錢なげ付けるに、一度も當る人なし、自然こ貌をよける事を得たり、ある時江戸より參りたる人百錢をなげつけしに、お玉が貌にあたり額にすこしの疵を付けてよしなし、諸國より隨分大氣なる參りけれども錢百文なげつけしは是れがはじめなり、大かた世の人の心、さのみかはらぬ物ぞかし』

▼みめぐり

三圍の句も、其角雨乞ひのそれは、ザラにあつて餘りぞつとしたものはない。

土手へ鳥居がめりこんだやうに見ゐは、いつも遊むで直に頭に浮ぶ、畫中の人たらしめる

太郎が軒も笠木ほどみゆるなり

川傍柳の句であるが、今日まで川柳家の口にほめられて居ない珠玉である。

太郎からべらぼうこなり川を越し

の葛西太樓で、軒がヤハリ鳥居のやうに川から少し見ゐたのである。

河東節の隅田川舟の内

すこし此方の森つゞく、若葉に植ゐし鳥居こそ、笠木ばかりを三圍の、伸びあがらねは見ゐぬなり

なんだか川柳こ河東の渾然たる天地こなつてしまふ。

蜀山人の詩

鳥居半出大川端　遙指三圍稻荷壇
蘆葉刈來盛洗鯉　蒲燒食盡割長鰻
葛西號掛太郎鼻　晋子句翻百姓肝
向晚船頭呼不起　犀根舟內只聞鼾

言問團子を燒いた火が三圍に延びなかつた事は天祐である。黑板博士曰く『三圍の境内を中心こせる一區は、丁場や借家から蠶食され俗惡化された、向島のオアシスである墨堤らしい墨堤は今僅にここにその名殘を留めて居る、それすら殘酷にも葬らうこするではないが、江戸の歴史こ結びつけられ江戸の風俗こ關連して、其面影を忍ぶに足る處は此墨堤が殆んこ唯一の地點である。昨日は今日の昔こいふ、歴史は刻々に動いて已まぬ、然し今日の自分は昨日の自分の引續きであるこを無視するは餘りに明かな誤謬である。東京市民は江戸市民でない、然し其二代目である善良なる習慣うるはしき歴史を無視する惡改造は斷じて不可である、甚だしきに至るこ自己破滅である。古川柳一句を前にして實に悲痛な絶叫ではないか。

▼なぎの葉

なぎの葉を芝居の留主に掃き出され

名句である丈けに、古い雑誌に斷片的に研究された記憶はあるが、今手元に一册もない。馬文耕の江都著聞集をよむで、なぎは伊豆權現の神木、女の貞操を現はすために玉菊以來鏡に入れる事が流行したと某氏の說であつた。近世奇蹟考に『鏡の裏に梛の葉を入るゝことは玉菊が始む』は、前說に類似があつて誤りであらう。水調子の最終に『後世の燈と明らけく、曇らぬ月の面影は、梛の枯葉の名ばかりに、鏡の裏に殘るらん』とあるが、既に寛永以前から鏡に梛を入れる風俗はあつたのである。嬉遊笑覽卷一に、誹諧毛吹草したの葉を梛にもちひのかゞみかな宗房、風波靜まるをなぎといふ、波なければ水鏡の如し、その名詮を取つての事と見ゆ。江戸枝折に、梛の葉に今玉虫のうしろ向といふ句あり、玉虫は白粉匣に入る故なりと、見にて居るが、此說は一層信用は出來ぬ附會である。

買物に包んで臭れた新聞をよむと、南方熊楠先生がナギの花と題し詳細說いて居らるゝ、其一部を拔く。

ナギの花は初夏に咲くも目立たない、定家卿の詠に、千早振熊野の宮のなぎの葉を變らぬ千代の例しにぞをる。その常緑の葉を神威の盡きざるによそへて社頭に植ゑたのだ、紀州切部王子のナギの葉をかざして熊野へ參る事保元物語に見ゐる畏くも白河法皇は前生に蓮花法てふ沙門なりしが熊野信心の法力で天子に再生あつたと申す事で百餘度も詣で玉ふ。老後の御幸大儀と有つて都近く三山勸請の御志あり、神の告げに我住む所必ずナギ生ずべし、これ我殿舍なりと、因つて諸處をみせしむるに一夜の內にナギ生じ大木と成つた地ありそこに新熊野宮をたて洛の三山として繁昌した。

伊豆權現實は百濟の王孫辰爾で、學者を祀つた社とか、其高粗父辰孫王は初めて韓國より書籍を持來り本邦に文學を起した人だ。奥永式目の起請にも違犯者は別して伊豆箱根兩權現の神罰を蒙ると有つて殊に武家にあがめられた。社の境內に高さ十丈のナギあり、其葉を持たば災を免れ、鏡に敷けば夫婦仲睦じといつたが、天保三年大風で倒れてしまつた。ナギの葉は筋強くいくら引いても切れぬから力柴と呼ぶ、從つて夫婦の緣のきれぬ樣、離れてゐても相忘れぬようと鏡の底に藏めて守りとした、古い投節に『今度ござらばもてきてたもれ、いづのお山のナギのはを』元祿十六年板松の葉には『今度ござらばもてきてたもれ、ぎふのお山の檜の枝の浮き世かかりの思ひをば』

生活と唄　啞人

辛抱は金と親爺にきかされた
ことを子に言ふ年になりそう
ボーナスを氣にして今日も勤めけり
食後の暇に出した粉藥

（をはり）

大朝、大毎に與ふ

麻生路郎

◇

新春の大朝、大毎には吉例によつて名家の短歌、俳句、挿畫が滿載されてゐるが一句の川柳、一人の川柳家さへ之に伍してゐるものがない。この點から觀て兩社とも川柳に對しては頗る冷淡なやうに見受ける。

◇

勿論今日の新聞社は全く資本主義に壓倒せられてゐるのであるから多數お客樣方の御機嫌さへ滿足に伺へれば、それで能事終れりといふ觀がないでもないが一方では微々たる我が國の飛行界へ一臂の力をかして世界的の事業たらしめたり、一講家一小說家をして實力以上の名をなさしめたりしてゐるこころを見ると必ずしも營利のみに汲々としてゐるやうにも思へない。如何に微々たるものでも、伸びんとするものに對しては出來るだけの援助を惜まない樣に見受けられる。

◇

そこで私は思ふ。目下の川柳は文壇的に尤も下積にされてゐるが川柳そのものの本質から云へば他の短詩型たる短歌、俳句と比べて決して遜色のあるべきものではない。寧ろ今日の都市生活者の思想を盛るに尤も適切な短詩であるにもかかはらず、大朝、大毎が之をしりぞけて一顧だも與へないのは何故であらうか。

◇

兩社に於ても眞に新しい川柳に對しては相當の理解と同情を寄せてゐる人々もゐるのであるがその多くは未だに誤れる川柳觀に囚はれて『川柳は莫迦でない限りは作れる』とか『川柳は野卑なもので紳士の堂にのぼすべきものでない』とか『川柳は文學的價値がないから短歌や俳句と同一視すべきでない』とかいふやうな言葉を以て酬ひつゝある人々の存在は我々新川柳に禮讚しつゝある者の甚だ遺憾とするこころである。又一方では『川柳家は微々たる集團に過ぎない。社會では川柳が何んであるかをさへ知らない人が多いではないか。さうした一部のものゝために貴重なる紙面を割愛することは出來ない』と。この言一應は尤もである。が、それは單なる目先觀に過ぎないことを知らなければならぬ。なるほど現在川柳家の數は微々たるものかも知れない。が、それは作家としての話であつて川柳鑑賞家の數に至つては短歌や俳句に比して決して少くはないのである。その實際に至つては多年川柳に携はつてゐるものでなければ感知することが出來ないのを甚だ遺憾とするがその一例として日本全國各地の新聞雜誌には必ず柳壇のあるを見しも決して兩社の一部の人々が考へてゐられるほどに少

數でないことはあきらかであらうと思ふ。しかしそれ等の川柳の多くは眞の川柳を要望しつゝあ頗る貧弱なる内容のものであるから大朝、大毎が進んで權威ある柳壇を設置し、これが宣傳に一臂の力をかされたならば、近き將來の新春紙上に於て必ずや短歌、俳句、揮毫の掲載と共に力ある川柳を見るであらう。川柳に禮讃しつゝある私は世の川柳鑑賞家達と共に大朝、大毎兩社の編輯局員の廣闊なる襟度によつてこれが實現を俟つものである

近事片々

林田馬行

○

『私は藝術家ではありません、隨つて私達の作る川柳が藝術であるなどゝは思つてゐません。けれどもその川柳が藝術とやら云ふものだつたら儲けものでありまなごの言を臆面もなく人前にてうそぶく川柳家あり。頭掻き〳〵演說せるに等しその見苦しき、唾棄すべきなり。かゝる頭を以て社會と語り、民衆と語らんとする一部川柳家の無謀を嗤はずばあらず。

○

川柳界におのれ自ら卑しめる輩の如何に多き事よ。川柳を藝術なりと云ひ得ず詩人と語るを避け。藝術と語るを避く。井蛙に似たる輩よ。ああ洋服をまとへる丁髷川柳家の糞行する事よ。

○

『對照』新年號、日車氏の『味ふと云ふ事』なる一文を讀む。而して日車氏のいつに變らざる眞摯なる人たり、常に人間的に惱める人たるに限りなき愉悅を覺ゆる者なり。何はさまれ柳壇の第一指に屈すべき氏の常に柳壇より遠ざからんとする心境を惜しむ者豈我一人ならんや。

○

俺の死にさまいひさき軒の水
汽車の汽笛に癒りたくなる
脇腹へ猫よ心の靜けくも
あまりに丸ければ南無、見る月
コロ〳〵と鳴る石鹼だ嬉しさだ

こは金澤の宮島龍二（柊花）君の作品なり。我龍二君を知らず、君が病弱の人たるは我かねて君の作品より知る。然して君の句のいつも光れる事よ。

我は云ふ。川柳家に病弱の人多し。されど君の如く、我等の胸底を刺して尙やまざる作品を示し呉るゝ人少し。

かゝる人にしてはじめて川柳は生く。病弱に惱める川柳家諸子よ。川柳とはおのが心境に何等關係なき事物を拉し來つて讀み込むものにあらず。眞の川柳はおのが足下に轉がれるを知らざるべからず。

○

大正十四年も暮なんとする二十九日、遠く北海道、田中五呂八氏編著にかゝる『新興川柳詩集』を手にす。逸早く頁を

繰るに、常に革新川柳を否定し革新派を否定せる二三作家の句を發見せり。

我もこより傳統川柳家の革新的作品を示すの理論的なるを奇とせず。只是等の作家が、自派の爲に何事か爲さんがため常に是等を以て下劣極まる揚足取りの材となすの愚を憎むものなり。

――（一月十日夜）――

二篇素讀後始末

省　二　生

拙稿に就ては必ずや多くの異見が出る事と期待して居る、卯木氏は私信にて『大體に於て貴見に同意しますが（一四三）の寒念佛は寂よりも寒ですから（六一一）の錢買ては替ですから華魁よりも禿と原解をとります』とあつた。

（二九七）の厄年の事は自分の筆が盡さなかつたかの疑もあるので念の爲物集博士の辭典から其儘拔く『其人に禍あるとし陰陽家にていふ事にて其人のうまれたる年により禍ありといふ、たとへば男は二十五、四十二、六十一、女は十九、三十三、三十七を厄年とし殊に男の四十二女の三十三は大厄として、其の前年をまやく翌年をうしろやくとよび、ものいみして慎む事あり、いはれなき事なり』厄年は時代に因つて色々相違してゐたもので古くは男に三十三女に七十三なども見にてゐた。（一〇八）の金持を鶯の句の金衣鳥と言つたのは俳句ではまゝ用ひられて居たので、開元遺事に明皇禁苑中に於て黃鳥をみる、呼んで金衣公子とす故に金衣鳥の名あり、儿董の句に金衣公子と前置して『鶯や小太刀佩いたる身のひねり』（三六三）ごぜのかね口おしそふに見て貰ひ

此句に就て『鯱鉾』誌上卯木氏が瞽女は下品なもの許りでなく、柴の一本にもある如く琴の嗜みもある上品なものであつたと述べられたのに對し櫻風氏が類句を羅列して諸國巡業の物貰ひが主であつた事を說いて居らるる、古句は奥方を琴で妾を三味線で明かに代表させて居る

三味線で琴をひきけす妾の世
ふきよりはぺん〳〵草がお氣に入り

瞽女も亦琴は上品の部である

ついそばの爪をたつね不自由さ（上品）

てとてとてとてひきて上總ごせ（狂）（下品）

の兩者があつたのだから句に依つて何れなりやを知れば好い、『盲女もやむごとなき御まへに侍るよりごぜとはいゝ習へるにや』『是もれき〳〵のおくがたへも出入又はいとけなき娘子に琴三味線を敎へ侍れば身持きやしやにありたきものなり』なぞ瞽女を評してある、要するに手を取り合つて一艘につまれて出て來る程田舍瞽女の數が多いのだから句も亦多い事は明かだ。（をはり）

葭乃さん咲けば咲いたで句が出來る

馬　行

敬慕せる路郎氏へ

安川久流美

◎

お正月は例によつて水府君の舊作ぢやないが

紋付にのむ事ばかりつき櫻ひ

で一週間ならぬ、十日餘は夢のやうに過ぎました。漸く各地川柳誌の新年號も、けふ漸く内容に眼を通したわけです。

× ×

あなたの『三十年計畫』には實際共鳴いたします『人間は自分で穴を掘つてそこへ籠り込むと却々動きが取れないものです』は立派に現在の川柳界をゑぐつてあります、然し私等は川柳の進みつつあることは到底こゞめ難いのですから、いつまでも千子の躍る水の中には居られません、時の流れについて行かねばなりますまい、古句の研究は考證――歴史として私等が武内宿禰性、長生きしても必要の事ではありますが、それは實際、生活と沒交渉と思ひます、第一働いてゐる人間には、寸分も餘裕がないのです、もつともつと實生活にふれた句を作る時代です――政黨の肩書じやあるまいし、殊更に『革新』なんて愚にもつかぬ字は明かに眼ざはりです。

あなたの說の通り、手紙すら書けぬ御無沙汰は日常生活に餘裕のない證據です。

◎

初心者に寓性の自由をのばす點では多少特意はありますが『川柳』なるものを初めから間違つた觀察を有つてゐる者は百まで生きのびても同じものです。

◎

實質に於ては川柳が俳句より以上社會的にみゝこめられねばならぬ時季なのです然しすべてを文化々々と洋風さへまねればよいと思つてゐる現代人の頭では川柳の味がわからう筈がありません。

俳學とよばれた芭蕉の

古池や蛙飛び込む水の音

が――禪味といふものとすれば、現代川柳の代表句は確に哲味を帶びてゐると申さねばなりません！

然り川柳は寸哲學です、寸句です。

『三十年計畫』で幾人かの犧牲者を出さなくとも、既に俳人の凡倉連が想に於て離散してゐるのを氣の毒に思ふ、文壇とも詩壇とも俳壇とも別の道を歩いてゐる柳壇の人に、女優と古川柳を結びつけてゐる、享樂主義の老人が元老株として太平樂な奇焰を吐いてゐるのが川柳の進歩をせない原因です。（一月十日）

新戎橋より

庄万よし

眞相

亂闘とか忠烈とかの形容詞が第一につく

幕末の活動ビラを見てゐる中に、所謂彈丸雨飛の間に三田の塾では、福翁が淳々として新巧利説の講義をしてゐ姿をゆくりなく思ひ浮べる人肉の市と見られてゐる遊廓の女中に歴した三十の處女を見ることも少くない、一獲千金の北濱に五兩の小使に困つてゐる大供も居るし、無表情その物の樣な鮮人工夫に熾烈な戀を見付けることがある、棒にも箸にもかゝらぬ分らず屋の署長もあれば、血も涙もある勝負師もある、所詮太陽の黑點を知り重役の遊興振りを見ることが人生の眞相を知るものである。

型

型に入つて型を出づるを藝の至道とす型に入らずして型を毀すを藝の邪道とす型に入つて型に捕はるゝを藝の月並とす舞の手踊の足三味の盛、川柳の穿ち皆この外に出でず味噌の味噌臭きと坊主の坊主臭きと川柳家の川柳臭きを現代の三臭とす。

必　要

必要が向上を生み必要が練達を來たす戀人の化粧は愛を得るに必要なれども妻となつては化粧を要せず、パン以外に靈を要する人は煩悶あり訴ねさるべからず、意氣あり歌はざるべからず、義憤あり叫ばざるべからず、憧憬あり讃へざるべからず。

瞑想す、吾等は川柳を弄び川柳を樂しむ以外に川柳の必要を痛感絶叫する必要あり。

曰く曰く曰く

三好革郎

◆

大正十五年には大正十五年の川柳が生れなければならぬ。作品の背後に時代のカラーが色濃く流れて居ることは、作者がその時代の空氣を眞に呼吸して居る證左になる。我々は絶對に大正十四年の川柳を作つてはならぬ。

◆

駄洒落川柳は排斥さるべきである。皮肉川柳は敬遠さるべきである。ユーモラス以上のものが盛られて居なければならぬ。人生の一斷面を切つてそれを作者の人格の濾過器で充分不純物を取り去つたものでありたい。

◆

川柳は民衆藝術であり、大衆文藝である。貴族趣味の川柳には同感できない。獨りよがりは何れの場合にも共鳴者を見出せないと同時に鼻つまみものである。

◆

美しい薔薇にはトゲがある。その美しい方面ばかりを見るべきであらうか。トゲまでも摘出すべきであらうか。それはどうでもよい事である。トゲのあることを知つて居ればよい。トゲを知つた川柳の何ぞ少き事よ。

◆

漫畫には川柳味のあることを要す。川柳味のない漫畫でない。こいつたら漫畫家諸君には叱られるかも知れない。しかし漫畫味のある川柳だけが川柳でないこいつても川柳家諸君は決して怒るまい。それだけ川柳は漫畫よりも本質的なのである。

◆

川柳がワサビの時代はもう去つてもよい。川柳が米の飯となる時代が來なければならぬ、誰も彼もが川柳なしでは生きて行けない時代を作らなければならぬ。川柳家よ、高踏的態度を捨てゝ、民衆の中に叫べ。

◆

廐生先生は川柳界の天才だと思ふ。先生は川柳界にエボック、メーキングを作つた人だと思ふ。六厘坊が川柳界に革命を與へたとすれば、先生はその革命を完成せしめる人である丁度奈翁がフランス革命を完成したやうに。

◆

百の愚物よりも一人の天才を發見せよ一人の天才を育てよ。現代日本は各方面に天才を必要として居る、殊に川柳界に於てその感を深ふする。天才よ出でよ、天才よ野に出でよ。

新作邪瑠璃

西垣松雨

こゝ許御聞きに達しまする邪瑠璃の藝題あれやこれやの寄せ集め聞いて居つたら判るの段語りまする太夫自稱日本一輕石太夫蛇味線は引いたりひかなんだりトザイトザア！イ

今頃は半六さんどこへぞうしていやはるやら今更いやとはぞうよくな嫌ならいやと初めから言へばスツトントンでエーマー通やせぬ、蒸氣や出て行く煙は殘る殘る煙はしやくの種、權兵衛が種蒔や烏がほじくる三度に一度は氣やすめ二度はうそ三度のよもやに遂だまされてだまされてだます狐がだまされた、船を引き上げ船頭衆は歸る後にのこるはろくかいうそかい本かい誠かい、甲斐で見るより駿河よい、よいは横から夜中はまこも夜の明け方は後からさす窓の月きせるで開けるれんじ窓チンチン

鎗は錆びても名は錆びぬ誠錆びたらべーバーで磨け昔忘れぬ落し差し、もしく龜よ龜さんよ世界の中でおまへ程すきなすきなものは無いたこへ死んでも墓へはやらぬ燒いて粉にして屁で飛ばす飛んで行きたいあの家の屋根に木の實かやの根アラ喰べてゞも、おこらず教へて頂戴ネ三味線持つ手に火吹だけ

魂ばくこゝに止まりてうらみ晴らさでイヤ置くべーきーかツ、かゝさまいのうなぜかゝさまは早や死んだ死んで花實が咲くものかいなア、オゝ坊や泣くな嘆くなんなぼ泣いたこてさしめた此手が離さりよか東雲のストライキ去りこは〳〵エーつらいてなこおつしやいましたかネテテン。

附番突衝舊新柳川

横綱 **大關脇** **關結** **小頭** **前頭** **同** **同** **同** **同** **同**

末長くいびる盃姑さし下女いびり況んや嫁においてをや樂しみは嫁をいびるこ寺詣り叱らずに隣の嫁を賞めておき案じたよりはむづかしい姑なり線香をたて〳〵先の嫁をほめありんすが第一姑氣に入らずなんこなくにくい姿を姑もち姑は嫁の時分の意趣返し姑の頓死の知らせ嘘のやう

前頭 **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同**

のう嫁御已れは息子の何んじやいの今の眼は誰れをみやるこ姑婆百八のうち五六十嫁のここ阿彌陀より馴染の嫁がいじりよし世間の嫁は手利だの柔和だの眼鏡から大きく見ねる嫁のあら蠅叩きこれ幸ひこ嫁の臀手間ごつた髪を姑じろ〳〵見まだしものここに姑は無筆なり嫁のここ姑身ふりをしてはなし

蒙御免

司行

嘘のつき合姑こ仲がよし
姑の眼に仰山な火がいこり
押入をあけて姑無口なり

呼出

姑の氣のいゝ時に嫁話し
お嫁御におきゝなさいこ姑御ね
洗立てせぬが奇麗な嫁姑

勸進元

古今川柳家

版元 啞人

横綱 **大關脇** **關結** **小頭** **前頭** **同** **同** **同** **同** **同**

中日に蓼のほこりを嫁はたき
常不斷鬼の念佛嫁はきゝ
寺參り嬉し涙を嫁こぼし
看經がすむこ居住ひ嫁直し
留守かして聲のありたけ嫁笑ひ
望まれて嫁一本はめ二本はめ
連れて來た下女ばかり嫁叱るなり
指二本やつこのここで嫁ねだり
彼岸中嫁の笑ひの本音が出
みんな顔かくすが嫁の大笑ひ

前頭 **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同** **同**

仲のよい嫁はお經をよみ習ひ
嫁の智慧姑の角をかくさせる
親類を見知るこ嫁は木綿もの
馬の尻頼んで嫁は通りぬけ
値切られて嫁は奥から出て貰ひ
もつこ寢てごされに嫁は消たがり
汗を拭く嫁はれものにさはるやう
裏口へ嫁の願ひは鬼ずだれ
恥かしさ嫁据風呂の湯がこぼれ
ありたけの力で叩く嫁の孝

川柳塔

◇　井上刀三

男一匹鰯で飯をすませたり
病篤き日は雨戸より明けぬ
自惚れの甚だしきは鼻をかみ
死ねと言へば僕は死ぬ戀なり
嘘をつく事に馴れたりビルディング
實際馬の骨なる情婦なり
電車に縋かる氣持を續け居る
地獄へ行くならむ死にたくはなし
老ひて尚拾萬圓に利子がつき
母が鬼子といひしがまことか
珍しく早く起きたり續けむと思ふ
皺を笑へり四十位で死にたし

◇　竹田芦穂

男の涙子の死に顔へこぼれたり
苦の霜正月らしく輝いて
寶戎斷る友の輕い咳
我儘が住み憎い世にして終ひ
淋しさの手が懐であたゝまり
失業の二人小公園で逢ひ
休職へ肥ねましたなと如才なし
乾板を玄人らしくうなづいて
元日の疊晦日の色でなし

◇　松本助六

母親の最後の手段乳を出し
百圓を換へて懸取輕う去ぬ

◇　關本雅幽

こま廻すやうに伜を皆つかひ
山吹のやうな姿で中將湯
手の平へ載せて貰へるだけの事
方針を立換へ捨子するのなり
うまい事言つてみんなの肩へ乘り
高遠の理想するめで飲みながら
失敗のいゝ標本だ俺を見よ
不機嫌なわけは此の頃馬が瘠せ
顏賣つて居るのを女房泣いてゐる
出世すりやするだけ俺が怖からう

◇　西垣松雨

他人から見ればおかしい程嘆き
一月は歳を言ふのに間違へる

◇　庄萬よし

社長ふこぶつきらぼうがお氣に入り
逢ふた方が矢張よかつた未練なり
薬牡丹を買ふ間もないに儲からず
丙午編物ばかり凝つてゐる
よく笑ふ花嫁ですこだけを姉
紋付を脱げば女房らしくなり

◇　黑木莢豆

のつけから怒つてみせて逃げんこすチャルメラのあこは緣にふけてゆき
思ひ切りもよく辯論も達者也
菱の葉に蜻蛉のこまる弟の日
賽錢もはなればなれの音をたて
父母を奪つた金こ知られたり
貰入れて意識のあらん限り飲み
理性程冷たい貌はなかりけり
冬がみゐるが何も見あたらず
眞夜中の時計に動く佛樣
初戀の彼方にみゐる里心
泣ごこ泣こまいこ兄弟二人
妹は何思ふのか穴をみる
をぢさんこたよつてくれる溫さ
妹も淋しい顏で日が暮れる

◇　森田輝翠

ひこごこの樣に忘れる借りの事
九官に驚かされる藥取り
水鳥の暇は自然に流れてゐ
跨がつた木馬に腹の冷ゆる事

能率に關して達しまた屆き
花咲いて素燒の鉢が少してれ
ストーブへ年寄二人氣が永し

河南放馬

◇上官の眼にも坊ちやん育ちなり
廢娼の叫びへ冷笑して過ぎる
判取帳小僧裏迄にじませる

吉川啞人

◇あつさりと云ひ負かされたよい亭主
ブローカー序のやうに聞いてゐる

三好革郎

◇理屈だと言はれることの淋しさに
絞られる身の運命をぢつと見る

岩崎柳路

◇不見轉の方が上手な流行唄
町會の提灯搖れて寒い晩
裏白が風に搖れてる藏の窓
出前持樂屋へ行くを嬉しがり
境界も無くお隣の墓地が見ゐ
誘ひ人は茶漬かき込む音を聞き

馬場月兎

◇緣もない人に欠伸をうつされる
湯豆腐を通す鴨川時雨て來

高橋かほる

◇手の卑下をして相性を見て貰ひ
玉子酒象牙の箸でかきまはし
うま合ふた人と人とで餅をやき

伊藤彦造

◇新世帶二人で井戸の水を汲み
新世帶まだ戸の開かぬ仲のよさ

林田馬行

◇死ぬる事知らしてやつて何になる
藥瓶提げて弱者の數に入る
落付いた氣持の嫁に三月經ち
ピストルが一發戀のあともなし
氣焰まで淋しいものと成り果てぬ
氣まぐれにしてはつきり生れ落ち
サーベルを吊ると喰はして呉れる也

新婚のひろし君へ

今日からは白木簞笥に狹い部屋

橋本二柳子

◇まだたれも來ておらぬかと幹事ぶり
夜泣うどんが來る迄の夜業なり
不斷着のまゝ三ヶ日暮す父

編輯室より

▲社に宛てゝ、私に宛てゝ澤山年賀狀をいただきました。有難う

▲年賀狀をいただいた方には、必ずこちからも差し上げましたが、所が書いてない方には困まりました。二柳子君を煩はしても判らないのは、そのまゝにいたしました。何れ郵便局の誤配で出しながら、屆かないのもあるでせう。何れもお許しを願つておきます。私の方へも、お出し下さつたのに屆かないのがあるでせう。何年來寄越して下さる方で來ない方もありますから。

▲大朝の「修羅八荒」の挿畫を、描いてる伊藤彦造氏が同人になりました。初めて作つたといふ川柳が、川柳塔に出てゐますから御覽下さい。最近の同氏の近況を詠んだものです。

▲東京に同人が一人殖えました。大阪から千葉へ千葉から東京へ移つた酒井駒人氏です。

▲刀三氏は新春に鄕國丹波へ、五日歸坂。

▲中旬に右大臣氏が來神されたが、同氏の多忙で遺憾ながら逢へませんでした。

▲革郎氏御兩親とも病褥にあるので、心配してゐられます、慰めてあげて下さい。

▲徹底郎氏の令閨が、七日に亡くなられました、同情の外ありません。

▲安井ひろし氏が、十二月に結婚されました。お正月は夢のやうに過ごしてゐられるとか聞きました。

▲蛭子省二氏が一月中旬に名古屋まで、來られたさうですが、お急ぎらしくてお逢ひすることが出來ませんでした。

▲新春號はおしつまつての、印刷で誤植のあつたことをお詫びいたします。殊に甚だしかつたのは同人名の中に吉川啞人、竹田蘆穗兩氏を落植したことでした。それから蘆穗氏の宅にお孃さんが、出來たやうに報じておきましたが坊つちやんの誤りでした。

▲一月二十二日に、金澤の中川眼隱子氏が來社されましたが、殘念ながら二時間ほどの差で逢へませんでした。

▲塊佛氏は塊人に、みのる氏は一文字に共に改號

▲本號の編輯は松郎、二柳子、馬行、刀三と私でしました。（路郎生）

第一日曜柳談會

毎月第一日曜の午後一時から私の宅で、柳談會を開きます。大いに喋べりに來て下さい。集つた方の中で、次回の講演者をきめてもいゝし、飛入りに喋べつてもらつてもいゝことにして置きませう。第一回の二月七日は私が何か喋べりませう。夜の十時に散會しますから勝手のいゝ時間に來て下さい。地方の方は第一日曜を私に對する面會日にして、下さつても結構です。萬一私に差支が出來ても誰かゞゐることにしておきますから、遠慮なく來て下さい。差支が前もつて分つてゐる時には雜誌上で知らせます。會費は要りませんがお茶位は出します。（路郎生）

▲本社新年句會を一月廿四日夜日本橋倶樂部樓上で催しました。出席者六十六名で主幹路郎氏の柳壇の將來を題せる有益成講演及記念撮影等に十一時盛會裡に散會しました。當日の句稿其他は次號にて發表致します

▲主幹路郎は今夜所用の爲上京されます。何れ川柳土產話でもある事を存じます。

（一月廿六日校正室にて松郎生）

◀川柳家の御寫眞は是非▶

黒木寫眞館へ

西宮市與古道町三二番地

第五回

全國川柳名句番附募集

川柳名句會主催

（尾山夜半杖擔任）

募集規定

課題　「親」（おや）（意味でもよし）
「動く」

創作たる事　一題二句吐（四句）

用紙　半紙半截に一句宛明瞭に書く事

選者　現代大家三十餘氏

探點　三光（各三點）
五客（二點）
佳句（一點）

創作賞

東西大關　十八金メダル　一個

東西關脇　純銀カップ（當選句入）

東西小結　純銀カップ（當選句入）

東西前頭　モス風呂敷一枚（五句宛）

投吟所　北海道札幌市南三條西九丁目　尾山夜半杖宛

第三回出句者互選

出句者互選は名句番附に採點せず、別に互選句集とし合點成績に依り褒賞を呈す、互選は公平を尊重する事は勿論合意的不正な選と認むるものは棄權とする互選規定は無記名印刷紙及互選用紙と共に配布す。

互選成績賞

一等　旅行鞄　壹個
二等　純銀カップ　壹個
三等　金張シャープペンシル　壹本

以下二拾等迄呈賞

配布　出句者には名句大番附、名句番附、選句集及互選句集（合冊）を配布す

會費　金壹圓（郵券代用十錢以下一割增）

發表　六月中旬の豫定

締切　大正十五年三月十五日（原稿整理約一週間中受附）

社主藤堂氏の
ための惡文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焰をあげて、あとであんなことを云はねばモット本が賣れたらうにと後悔をするところなど仲々うれしいおぢさんである。なんでも社會に貢献するために本屋をはじめたのだといふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買って）このおぢさんを滿足させて下さい。

＝路　耶　生＝

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第四號課題

二月十日締切
（各題二十句以内）

▼硯　坂井久良岐選
▼風邪　林田馬行選
▼下宿　岩崎柳路　森田輝翠　共選

第三卷第五號課題

三月十日締切
（各題二十句以内）

▼細引　白石維想樓選
▼家賃　吉川啞人選
▼蜂　太田一聲　橋本二柳子　共選

毎號募集

▼近作柳樽（三十句以内）　麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）　塚崎松郎編
▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　參拾錢（郵税共）
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十五年一月廿五日印刷
大正十五年二月一日發行

第三卷第二號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸二郎

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋　岳文堂
（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田
（金澤）石井　（松任）三須　（福館）石森

川柳雜誌社同人

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　伊藤彦造　井上刀三　馬場月兎　原史風　林田馬行　橋本二柳子　西垣松雨　德田双柳　太田徹底郎　太田一聲　河南放馬

亀井花童子　吉川啞人　高橋かほる　高橋古城山　見柳骨　竹田蘆穂　竹内多聞　塚崎松郎　黒木莢豆　矢田右大臣　柳川洲馬　松本助六

藤本卯之助　駒井美の作　麻生葭乃　佐々木駒默閣　酒井三好革郎　宮内一洲　庄萬よし　森田萬輝翠　關本雅幽

（いろは順）

第一支部　大阪市南區新戎橋南詰　幹事　庄萬よし

第二支部　大阪市北區南同心町二丁目四五〇　幹事　原史風

第三支部　岸和田市下野町四一九　幹事　太田一聲

第四支部　大阪市港區鶴町三丁目一一〇　幹事　關本雅幽

第五支部　大阪市東區餌差町二二一番地　幹事　駒井美の作

第六支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園　幹事　佐々木默閣

第七支部　大阪市東淀川區南濱町一九四　幹事　西垣松雨

第八支部　神戸市上中島町一丁目四二　幹事　宮内一洲

第九文部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬

第十支部　大阪市外豐中榮通二丁目石賀方　幹事　林田馬行

第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内　幹事　岩崎柳路

第十二支部　函館市青柳町五〇　幹事　亀井花童子

第十三支部　大阪市住吉區安立町五丁目一二二　幹事　德田双柳

第十四支部　朝鮮仁川仲町二丁目八　幹事　矢田右大臣

糖尿病新藥

インスメリチン Insmellitin

本劑 は本研究所創製にかゝる二種の獨立特効藥（各種糖尿病に對し）**パホミン**「膵臓抽出物」と**ヤタロン**「五加科植物抽出物」とを主藥とする錠劑なり

特色 **パホミン**は簡單なる徑口的攝取により安全に血糖及尿糖を容易に〇、二以下に降下せしめ得、**ヤタロン**は器質的病變に及ぼす根本的恢復整調作用を司る

▼日常の生活に拘束を加へず▲ 副作用絶無

適應病 各種糖尿病、腎臓病兼糖尿病、結核兼糖尿病、糖尿病に起因する口渇、饑餓感、痙攣、癤常習便泌、不眠症

包裝 **インスメリチン錠** 九〇錠入（一三回十五日分）一八〇錠入 二五圓（卅日分）

醫科專用 Pahomin + Yatalon = Insmellitin

Pahominpul. 25gr. 50gr. / Yatalonpul. 50gr. 100gr. の御注文は發賣元へ乞ふ

發賣元 大阪市東區仁右衛門町二八八 **熊谷英商店**

電話東三五一四 振替大阪七一〇一三

製藥所 大阪市東區仁右衛門町二八八 **熊谷糖尿病腎臓病研究所**

（概說實驗及抄錄進呈）

一手特約店

東京 銀座 松屋吳服店新藥部

大阪長堀橋 高島屋吳服店新藥部

名古屋中區 松坂屋新藥部

よろこびにそへて白鶴屆けこき
榮轉の今日も白鶴呑み續け
白鶴がいつものバーへ運はせる

清酒

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十五年一月二十五日印刷　大正十五年二月一日發行

川柳「レコード」　松郎選

レコードが踊つて歸る文化村　ヒコシ
レコードの藝と圖星をさゝれたり　番茶
落籍されて聞くレコードに氣が沈み　塊佛
レコードの數が自慢は初手のうち　泗水
レコードの都々逸だけを下女好み　萬よし
レコードへ敎へる樣にわじを卷き　深川
聞き惚れて居るレコードへちとあわて　馬行
子煩腦々童謠を買わされる　高洲
レコードで聞いた名の妓を一寸よび　二葉
もー一度掛けるレコード横へ置き　憲翠
レコードの節を覺へて縫ひ上り　松郎

本場は大阪府主催第一回木竹利用品展覽會に於て賞狀及金牌を附與され續いて大大阪博にて審査委員會の推賞を得ました

純國産最高級
ツバメ號蓄音機

中出賣附品景下目
景品百五十圓以下
全部空籤ナシ

ツバメ號第一號
定價　金壹百五十圓
詳細はカタログ御贈呈

ツバメ印ニットノレコード代理店
ツバメ號蓄音機　發賣元
戎屋蓄音器店
大阪南地戎橋南
電話南五四二番

第三卷　第二號（第二十五號）　定價金參拾錢